

7月のコラム ～小さな便利が周りにたくさん～

先日、コンビニ弁当を買ったら、封をしているセロテープが手で切れるようになっていました。最近、身近な商品の「小技」に感動させられ続けています。いくつか挙げると、調味料などが入っている小さなビニールもハサミを使わずきれいに手で切れるようになっていました。レトルト食品の封を開けるとき、斜めになるので困っていたら、いつの間にか真っすぐ切れるように改良されていました。レトルトついでにカレーですが、最近まで湯煎が必要だったのに電子レンジ対応になっていて、おまけに紙の箱が温める間のスタンド的な役割を果たせるようになっていて驚きました。小麦粉やかつお節の袋等も最近ではジッパーがついていて、輪ゴムやクリップは不要になってきています。

これらの便利な機能は、企業競争の中で研究者、商品開発者の努力の賜であり商品の価値を上げているわけですが、その割に価格は上がらないなあというのが私の感想です。日本の労働生産性が低い要因の一つはこれだと思うのです。サービス業における気配りが行き届いた接客のスキルは、世界でも例に見ないほどの高レベルですが、そのサービスに価値を持たせていない気がします。もちろん価値には、誇りや満足感などもあり、全てを貨幣価値に置き換える必要はありませんが、こんなに素晴らしい細やかな技、技術に対してもっと評価を上げていいのではと思います。もちろん消費者としては、安く簡単に受けられるその便利さ、快適さの恩恵を享受しているのですが。

話は脱線しますが、「糸切り歯で糸を切れますか？」私が小学校の時に、先生が皆にした質問です。当時、祖母や母が裁縫をしているとき、糸を口元に持って行ったかと思うと一瞬で糸が切れていました。まるで魔法のようで、真似をしてみましたが、歯にひっかけてギリギリと引っ張って切るのがせいぜいで、その技はついぞ身につけることはできませんでした。最近では、家で裁縫をすること自体減ってきているので「糸切り歯（犬歯のことです）」という呼び名さえも消えつつあるかもしれませんね。

昔から爪や歯の力業を駆使してきた私ですが、そんな能力？は必要がなくなってきました。ほんの少しの寂しさを感じつつ、経年と共に色々な機能が衰えていく中での便利な機能を楽しんでいます。

2021年7月 水田かほる

